



固定遊具を考える

山本秀人

本号に掲載されている実践記録「固定遊具づくりを父母とともに一名東保育園での取り組み」に関わらせていただいた。当時、子どもたちの発達に応じた固定遊具をみんなで作ってしまおうというプロジェクトが結成され、保育者・父母、そして建築士、さらに工学部と保育者養成の大学教員が顔をそろえ、夜な夜な「あ～でもない、こ～でもない」と語りあったことが思いだされる。園庭にみんなの知恵が凝縮されたあたたかい温もりのある木による固定遊具を造りあげるのであるが、その取り組みの真ん中には、いつも子どもたちの笑顔があり、完成したときの充実感はとても大きなものであった。そして、その固定遊具を実際に子どもたちが使い始めるのであるが、こちらの意図通り年齢に応じた遊び方を子どもたちが見つけていくのである。ついでながら、作業当日のお昼休憩にみんなで食べた給食の先生が作ってくれたカレーライスの味は今でも忘れられない（詳しくは、実践記録を）。

他方、最近訪問したある保育園の固定遊具の異様さには驚かされた。ブランコは外され、すべり台は使えないようにビニールひもが張りめぐらされ、さらに唯一子どもたちが遊んでいたジャングルジムは年齢によって登っていい高さが決められていることが見てとれたのである。そのあたりのことを園長先生に聞くと、「けが防止」との返答であった。話をしているうちに、固定遊具で遊ぶことで子どもたちにどのような力が身につくのかという発想を持ちあわせていないことがよくわかった。確かに、固定遊具で遊ぶことの有効性が指摘されている一方で、子どものけがによる固定遊具の使用禁止や撤去が話題になっているのも事実である。

本号では、固定遊具の歴史をたどるとともに、どのような目的で設置されたのか、そこでどんな力が育てられたのか、また育てようとしているのかについて明らかにしていきたい。

(やまもと ひでと／愛知・日本福祉大学)